

インターラカデミーパネル2000年会議について

—50年後の地球のための科学の役割—

日本学術会議第6部会員 木 谷 収

来る5月15・18日に世界の約80ヶ国のアカデミーの代表が集まるインターラカデミーパネル(InterAcademy Panel, 略称 IAP)2000年会議が東京国際フォーラムで開かれる。IAPは、国際問題に対して科学的側面から情報を政府や国際機関に提供したり、また勧告を打ち出したりすることを通じて、科学者の意見を広く世界に示すことを目的としている国際組織である。今回の会議では、2050年における食糧、エネルギー、水資源、人口と健康、消費、教育と情報の各課題について、自然科学、経済学、哲学など各方面の学術的な視点から議論が交わされる。人口、環境、資源などの問題解決のために科学は何ができる、何をすべきかを議論し、それに基づいて21世紀に人類が進むべき道を宣言文として発表する予定になっている。

IAP 2000会議の日程は、次ぎのようになる予定である。第1日目は、A. セン教授(一昨年のノーベル経済学賞受賞者)の基調講演、天皇皇后両陛下ご臨席の開会式、歓迎レセプションが夕方に行われる。これに先立って午前に第1セッション「人口と健康」、午後に第2セッション「食糧」が予定されている。「食糧」セッションでは、食糧需要、生産、分配および土地利用計画、灌漑、バイオテクノロジー、農業工学の役割などが議論されることになっている。2日目には「水」と「エネルギー」の2セッションが、3日目には、「消費」と「知識と教育」の2セッションが用意されている。それぞれのセッションでは基調報告と討議パネルが用意され、各国のアカデミーから来ている全員が参加する。最終日は総合討論、宣言文の発表、歓送会で会議を閉じる。

日本学術会議第6部は、食糧問題を中心課題の一つとして取り上げてきており、今17期は日本学術会議全体として、食問題特別委員会において安本委員長を中心に「新千年紀における食問題の解決に向けて」との題で報告書をとりまとめている。IAP 2000会議でも、これまでの議論を反映させることが期待される。農学アカデミーの佐々木会長は、日本学術会議の副会長としてIAP、米国アカデミーとの交渉やホスト側の実務を総括して大活躍しておられる。筆者は第6部を代表してIAP 2000会議の準備委員会に出て、公報を担当している立場から、多くの本会会員の方々がこの会議に関心をもたれ、会議の成果として21世紀の科学の方向を東京から発信することができればと願っている。